

ウェンディー・ロジャーズ¹の陳述書

貴法廷に二つの証拠を提出し、意見を添えたい。最初の証拠は、中国の臓器入手が国際倫理基準に準じていないことに関するものであり、二つ目の証拠は、処刑された良心の囚人（無実の人々）からの臓器入手に関する証拠に対する国際的な移植界をリードする一部の者の態度・行動に関するものである。二つ目の証拠に対して、考えられる理由を意見として提示する。

1. 国際倫理基準に準じない中国の臓器入手²

臓器提供の倫理における専門家として私は、中国で移植を受けるレシピエントのデータを報告する論文が国際的な倫理基準に準じるかを調べる調査チームを率いた。

処刑された囚人から移植臓器を摘出することは、世界保健機関(WHO)、世界医師会(WMA)、国際移植学会(TTS)、アムネスティ・インターナショナルなどから幅広く譴責されてきた。この譴責は調査へと拡張され、処刑された囚人から得た臓器の使用に関わる調査結果が提示された。2006年、国際移植学会は、処刑された囚人を臓器源とする研究に基づく論文を受け入れないと明示した。2006年の国際移植学会のこの声明は、処刑された囚人の臓器に関わる研究を基盤とする論文掲載を拒否する要求へと至り、国際機関、専門家協会、学者、学術誌による数々の声明で、処刑された囚人を臓器源とする研究の発行・発表を禁じる倫理基準が明示された。

これらの倫理基準では、査読（同分野の学者による検証）、学術誌の編集者により下記のチェックが求められている。

- (1) 研究には処刑された囚人からの生物学的なマテリアルが関与しているか？
- (2) 研究は治験審査委員会（IRB）（研究倫理委員会）の承認を得ているか？
- (3) ドナーの合意を得たか？

これらの倫理基準を維持するために、基準に満たない論文は拒否すべきである。

様々な分野の調査者から構成されたボランティアと共に、中国本土で行われた肺、肝臓、心臓の移植手術を報告する論文を、スコーピング・レビューの方法を用いて系統的に分析した。2000年から2017年にかけての8万5000件以上の移植手術の報告から、445の該当論文が見いだされた。

445の論文は下記の通り。

- 1) 33（7%）の論文は、処刑された囚人の臓器は研究に用いていないと明示。
- 2) 324（73%）は、研究倫理の承認を受けたと報告。
- 3) 6（1%）は、ドナーが臓器提供に合意したと報告。

国際移植学会などの国際的機関が義務付ける3つの倫理基準を満たす証拠をすべて提示している論文は1%に満たなかった。倫理基準に準じないにも拘わらず、情報を提示していないという理由から学術誌に掲載されないということはなかった。

さらに、処刑された囚人からの臓器は用いていないとする33の論文の多くは明らかに偽りであった。この中で、処刑された囚人から得たものではないとする19の論文では、2010年以前に2688件の移植手術を報告しているが、2010年以前は、中国全域で自主的ドナーは120名に過ぎなかった。その他の臓器源は、中国の認めたところによると、処刑された囚人だった。

この調査の結果、2000年から2017年4月にかけての中国での移植手術に関する公表された研究論文のほとんどは、囚人の臓器を基盤とする研究の排除・ドナー合意の規定に関して、倫理基準に準じていないことが示された。

(幅広い意味での)国際的な移植医療界で論文を査読する移植医、論文掲載を受け入れる学術誌の編集者が、個々の専門家としての倫理基準を適用していないことが、本調査で明らかになったことは、かなり憂慮すべきである。

ジェイコブ・ラヴィー教授とマリア・フィアタロン・シング教授との共同で行った別の調査では、肝臓に関する学術誌『Liver International』に発表されたある論文で、移植臓器源全てを自主的ドナーと偽って記述していることが示された。2通の手紙形式で発表されたこの調査の結果、この論文は同誌から撤回された³。

本調査の結論として、中国での移植研究で報告されている臓器源に関して、国際的な移植医療界は、最も基本的で概括的な取り調べをする姿勢がほとんどないことが示された。この国際機関からの懸念の欠如は、広域にわたり中国の移植研究者が倫理基準に合意しない理由の一つにもなっている。中国の移植界が国際的な倫理基準に準じない限り、中国との関わりもしくは国際的に学者を受け入れることを拒否すべきである、という国際移植学会が公言する方針にも拘わらず、この問題への取り組みが見られない。

2. 「処刑された良心の囚人の臓器源」に関する国際的な移植医療界の態度と行動

三年にわたり、中国での臓器源をテーマとした調査を行ってきたが、移植医療界の重要人物(うち二人はオーストラリアのシドニーに居住するジェレミー・チャップマン教授とフィリップ・オコネル教授)は、良心の囚人からの強制臓器収奪に関する証拠に積極的に馴染もうとしないようだ。彼らの態度は証拠を一蹴し、中国側の公的な否定を繰り返し、強制臓器収奪の疑惑は、「法輪功」グループの政治的戦略であると主張する。

私の見解を裏付ける証拠を提示したい。

良心の囚人を臓器源とする懸念を最初に認識した際、共通の知人を通してジェレミー・チャップマン教授（国際移植学会の元会長）にメッセージを送った。知人から伝えられた返答として、「中国では臓器のための殺害により無実の人々を迫害していると、真の人道主義者が誠意をもって確信していますが、この話には実質はありません。中国の移植病棟を実際に訪れ、この種の行為を探しても見当たりません」（2015年11月27日の個人的な通信。匿名で受け取ったコピーメッセージ）。しかし、中国への訪問者が良心の囚人からの臓器収奪を見せられなかったということが、事実無根の裏付けにはならない。

これ以後、チャップマン教授の語調は、良心の囚人の臓器源への言及をより強く拒否するようになる。一例として、（オーストラリア上院での）「外務・防衛・貿易合同常設委員会」での彼のコメント⁴を挙げよう。声明の中で（2016年報告書“Update”の要約に基づく）年間6万から10万件の数字を同教授は「でっちあげ」としている。2ページ目にチャップマン教授は、中国での移植患者の入院期間について詳細を述べ、中国での年間臓器移植件数が6万から10万件だとすると、米国の30～40倍の移植手術のためのインフラが必要とされると結論づけている。理解に苦しむ論拠であったため、同教授にEメールで明確にして欲しいと問い合わせたところ、米国やオーストラリアでは患者は数週間入院するが、中国では4～6日である（2018年6月6日のチャップマン教授との個人的な通信。コピーを本法廷に提出）としている。この回答は、チャップマン教授が2016年報告書“Update”の算出方法を理解していなかったことを示す。年間6万から10万件の移植件数は、一人あたりの入院期間を4週間と見積もって算出したことに対する認識がないようだった。

同じ文書の中でオコネル教授（4ページ）は中国の臓器登録制度であるCOTRSに言及し、この登録制度に記録された移植は合法的だとしている。しかし、この登録制度は独立監査への公開はなく、オコネル教授が語ることはすべて中国側からの聞伝えである。チャップマン教授同様、オコネル教授も「かなりの改革が行われたと納得している」が、この「納得」は中国側の招聘での訪中の際に与えられた、情報・病院に対する選択されたアクセスを基盤とする。情報は通訳を通して与えられたものである。これらの国際移植学会の代表者には、中国が主張する臓器源が真実であるかを独立して把握する術はない。

さらに信頼のおける調査への消極的な姿勢を示す証拠がある。2016年7月、「2016年報告書“Update”」の発表後まもなく、著者の一人であるイーサン・ガットマン氏がオーストラリアを訪問した。私は、ガットマン氏と移植医療界の人物との会合を斡旋して「2016年報告書“Update”」の証拠と調査方法を把握してもらい、調査における欠陥の可能性や弱点を指摘してもらおうと思った。移植医の知人を通して会合の手配を助けてもらおうと連絡を入れた。この知人を通してチャップマン教授は会合を手配すると言ってくれた。私は彼のオファーを受け入れたが、会合に参席する人物から「政治的」になるのではないかという理由で、彼のオファーは撤回された。そのようなことはないかと教授に確約するためのメールの長いやりとりの結果、最終的に私が自分で会合

を手配することにした。関心を寄せていると言っていたものの、チャップマン教授は会合には参席しなかった。証拠のない私の個人的な見解だが、同教授は他の移植医に参席しないように警告したと思われる。最終的に、一人の移植医だけが参席したが、数人の同僚も参席の意図を示していたということで、参席者が自分だけであることに本人もショックを隠せない様子だった。

また、移植医療界の人々との他の経験からも、臓器収奪のあらゆる主張を断固として否定する姿勢が移植医療界の内部にあることが示された。否定は主に中国からの実証のない確約に基づくもので、この問題に対して今日まで重ねられてきた詳細な調査と莫大な証拠にも無知である。

移植医療界の人々の態度に関する見解

移植医療界の人々との直接的な対話がほとんどないので、良心の囚人からの強制臓器収奪に関する証拠に対する全般的に消極的な態度に関しては推測するしかない。一度だけ例外があった。2017年、国際的な移植医療界の一人の人物と、匿名にして欲しいということで、長く会話をした。年間移植件数が6万件から10万件ならば、外部のオブザーバーにとって明確なはずだと強調していた。私の持ち合わせた情報では、臓器の透明なトレーサビリティ（ドナーの追跡）が欠如する中で、中国での移植件数に関する情報を説明することは不可能だった。強制臓器収奪の発想は考えるだけでも恐ろしすぎると認めるに終わった。

処刑された良心の囚人からの臓器入手に対して「あえて見ないふり」をすることに関して、以下の説明を提供したい。しかしその正確さにおいて証拠は存在しないことを強調する。

1. 黄潔夫はシドニーで数年間移植手術の要請を受け、ジェレミー・チャップマンなど現在シニアの臨床医となった人物の同僚となった。医学上そして個人的なつきあいを考慮すると、オーストラリアの移植臨床医にとって、黄潔夫が良心の囚人からの強制臓器収奪の制度の責務を担っていることを信じることは難しいかもしれない。その代わりに、死刑宣告を受けた囚人の臓器を摘出するという非倫理的な制度の改革を行う黄潔夫を支えるという英雄的な話術に目を向けるほうが、臨床医にとっては容易と考えられる。黄潔夫は良心の囚人からの強制臓器収奪を激しく否定する。このためオーストラリアの臨床医がこの問題を取り上げると、中国での改革をある程度助けることで達成されうることを、さらに中国との関係を危険にさらしかねない。
2. シドニーの病院と中国国内の病院の間にはかなりの研究その他の交流関係が存在する。移植に関するものも含まれる。例えば、2011年、湖南省の中南大学湘雅医院と、シドニーのウェストミッド病院の間で覚書が交わされた。この覚書の詳細を直接知る立場にはないが、中国のメディアが発表した取り決めの詳細によると、学术交流には、移植に関わる臨床および研究活動も含まれている。中国の研究には動物の皮膚を人間に異種移植することも含まれており、当時のオーストラリアでは認められていないことであった。この研究を報告する2011年の論文で、著者の一人 Shounan Yi 氏は、ウェストミッド病院への学術的な所属を報告している⁵。2016年、オーストラリアのメディア記事⁶で、この共同研究の関係における倫理性が問われた際、ジェレミー・チャップマン教授が押し切って否定した経緯がある⁷。

3. 最後に、中国の移植医がこの行為に関して公に語る自由がないことへの懸念を説明したい。中国国内の監視と残虐な弾圧の度合いは、欧米の基準でははかり知ることができない。(欧米の) 臨床移植医の中には、「告発者が出るはずだから良心の囚人からの臓器収奪を隠蔽することは不可能である」と見解する者もいる。この見解は、中国での全体主義制度および告発を考える者への威嚇の度合いを無視するものである。

本法廷の助けとなるのなら、これらの問題に関してさらに詳しい情報を提供したい。

ウェンディー・ロジャーズ

2018年11月17日

脚注：

¹ See Appendix 1 for my credentials.

² This evidence is based upon Rogers WA, Robertson M, Ballantyne A, Blakely B, Catsanos R, Clay-Williams R & Fiatarone Singh M. Compliance with ethical standards in the reporting of donor sources and ethics review in peer-reviewed publications involving organ transplantation in China: A scoping review. *BMJ Open* (accepted 13 Nov 2018), and is provided to the Tribunal in confidence. Once the paper is published, it can be made available to the Tribunal members. Please do not cite or repeat any data from this statement without permission.

³ Rogers WA, Fiatarone Singh MA, Lavee J. Papers based on data concerning organs from executed prisoners should not be published. *Liver International* 2017; 37:769; and Rogers WA, Fiatarone Singh MA, Lavee J. Papers based on data concerning organs from executed prisoners should not be published: Response to Zheng and Yan. *Liver International* 2017; 37: 771-772. Both letters are available from the Supplementary Reading list supplied to the Tribunal.

⁴ See Appendix 2 (with highlight on relevant sections)

⁵ Wang W1, Mo Z, Ye B, Hu P, Liu S, Yi S. A clinical trial of xenotransplantation of neonatal pig islets for diabetic patients. *J Cent South Unw (Med Scz)* 2011 Dec;36(12):1134-40. doi: 10.3969/j.issn.1672-7347.2011.12.002 (copy available on request).

⁶ See e.g. 'Chinese organ harvest furore', John Ross, *The Australian*, August 24, 2016.

⁷ 'Westmead Hospital rejects China link transplant 'benefits'' John Ross, *The Australian*, September 7, 2016.